

## 父と子の問題

宮川下枝

本学英文学会誌第二三号に於いて Emily Brontë の作品を中心として母と子の問題を取りあげた事があった。当然父と子の問題も追及してみるべきであろうかと考えられる。

一体エミリーの作品には情緒細やかな父と子の関係が描かれているのであろうか？ 母の愛情あふれる場面などは何処を探しても見あたらないが、父のやさしさに満ちた言葉には接する事が出来る。環境が作家に与える影響の大きさを示すものとして、彼女の小説には母と子のやさしい場面を見る事が出来ないのである。六人の子供を残して母が亡くなったのはエミリーが三歳の時であった為に彼女は母の細やかな愛というものを知ることがないままに成長してしまった。同じ環境に育ちながらも、妹アンは叔母のおかげで母代りの愛を受け、その作品 *Agnes Grey* には美しい母と子のおもいやりで満ちた場面が多く見られる。この叔母は母の姉でコーンウォールからはるばるやってきて、残された子供たちを育ててくれた。長旅を終って Haworth 牧師館に着くや、叔母は『何と可愛い赤ちゃん』と言ってアンを抱きあげたということが、伝記に書かれている。したがって赤坊の時から抱いて育ててくれた叔母は母親代りだった。

エミリーの父は妻を失ってから、自分の部屋で一人で食事をするというような変屈者であったと書かれ、又子供達が長靴をはいているのを見て、カンカンに怒り、その長靴を火に投げ入れて燃やしてしまった程のガンコ者であったとも書かれているが一方、子供達にアイルランド伝統の物語を語ってきかせる時は情熱を傾けて話し、炉辺でその語りに耳を傾け

る子供達は身を乗り出して熱中したというのだから、父の姿はエミリーには焼きついていただろう。「嵐ヶ丘」の中にもエドガー・リントンとその娘キャンシーの間には見事な父と子の関係が表現されているし、又エミリーがこの小説を女中ネリーから聞いて書いた物語形式にしたのも、子供時代に聞いた父の話す生き生きとした語りべの形式の話が身についていたものなのであろう。

又姉シャーロットは次第に視力の衰えてゆく父を気使って、いよいよ白内障の手術と決ると、その入院に付き添っていた。そしてそのベッドの側で書き上げたのがあの *Jane Eyre* であったというのは有名な話であるから、父に対しての娘の情は充分にあった訳であろう。また父としても娘シャーロットに対して如何に深い情愛を注いでいたかは次の事でも分るであろう。後年に至ってシャーロットが副牧師ニコルズ・ベルから求婚され、勇気を出して父に話したところ父の激怒はすさまじいものだったというのである。今や女流作家として有名になった女性に一副牧師の身分で求婚するとは身の程知らずだというのが、表面的な口実であるにしろ、内心は最愛の娘を奪われるという父親らしい憤りであったのである。そして父は遂に娘の結婚式には姿を見せなかったそうである。

... the marriage was solemnized in Haworth on 29 June 1854, by Nicholls's friend the Rev. Sutcliffe Sowden, vicar of Hebden Bridge. To be the only guest, Miss Wooler and Ellen Nussy came to the Parsonage the night before the wedding. .... Mr. Brontë did not mean to be present at the morrow's ceremony.<sup>(1)</sup>

(結婚式は1854年6月29日ハワース教会においてニコルズの友人でありヘブデン、ブリッジの牧師であるサトクリフ、ソウデン氏によって行われました。お客様としてふたりだけ、ミス、ウーラーとエレン、ナッシーが結婚式前夜牧師館に来ました。ブロンテ氏は翌日の結婚式には出席するつもりはありませんでした。)

## 1. 父と娘

ではほほえましい父と娘の美しい状況から先に挙げてみよう。

愛するキャサリンと結婚出来たエドガー・リントンもその新生活は長いものではなかった。恵まれた平和な家庭生活もヒースクリフの突然の出現によりキャサリンの心は千々に乱れ錯乱状態の熱病にかかって遂に死んでしまうのであるから、エドガーにとっては惨めなものであったが、残された娘キャッシーに対してはそれだけに深い愛情を注いで育てている。その教育は一手に引き受け家庭で全てを教え、散歩に同伴し心遣いを隅々まで及ぼし、キャッシーは可愛い少女に育ってゆく。母親譲りの美しい容貌で身のこなしは実に魅力的であり、優雅だったが、母のような激しさは身につけていなかったとある。

エドガーはこの愛する娘に激しい言葉など一言もかけることなく他の人が娘を一寸でも叱ろうものなら大変な事だったとかかかっている。And if reproved her, even by a look, you would have thought it a heart-breaking business. I don't believe he ever did speak a harsh word to her. He took her education entirely on himself and made it an amusement.<sup>(2)</sup>

(もしお父さまに叱られてもしたら、一寸にらまれただけでも、どんな悲しいことが起きたかと思う程の騒ぎです。もっともだんな様が、一言でもきつい言葉を口にされたとは思いませんが。お嬢様の教育は全部だんな様がお自分でお引き受けになり、それを楽しみにしておられました。) 後日更にキャッシーが成長し、ヒースクリフの策略に会って嵐ヶ丘の彼の住いに閉じこめられるという事件がおこる。鬼のような計画者の彼は自分の病弱な息子リントンとこの可愛いキャッシーとを無理矢理結婚させてしまう。その頃父エドガーは妻なきあと体をこわして病床に伏せている。父の病重しと知らされたキャッシーは何とかして逃れ出たく必死であったが、リントンがそっと投げ出してくれた鍵で戸を開けるとはいだすように家の外に出ることが出来る。そしてやっとの思いで Thrushcross

Grange にたどりつくとなりーにたずねる。

Ellen. Ellen. Is papa alive?<sup>(3)</sup>

『エレン お父さまは大丈夫?』

‘Yes.’ I cried. ‘yes, my angel, he is...’<sup>(4)</sup>

『ええ、生きていらっしゃいますよ』とネリーは答える。

The harvest moon shone clear outside.<sup>(5)</sup>

仲秋の満月が明るく外を照らしています。エミリーはこうした緊急の場合でも美しい描写を忘れない。

ネリーの言葉を聞くとまだ息はずませているキャッシーは、父の所へ駆け出そうとする。その早まるキャッシーを静めネリーは彼女にお茶を飲ませ、顔も洗ってやり落ちつかせてから『お父様には御自分は幸せよ、とおっしゃらなければなりませんよ』と忠告する。

エドガー・リントンは喜びにあふれて死んでいった。とかかっている。娘の頬にキスしながら低い声で話した父の最後の声に耳を傾けよう。

‘I am going to her, and you darling child shall come to us’ and never stirred or spoke, but continued that rapt, radiant gaze, till his pulse imperceptibly stopped, and his soul departed.<sup>(6)</sup>

(わたしはお母さんのところへ行くよ。キャッシーお前も何時か私達のところへおいで。と小声でつぶやかれたかと思うと、もう後は身動きもなさいません、口もきかれません。ただうっとりお嬢さんを見つめておられ、そのうちいつとはなく脈が止まり魂は飛び去ってしまいました。)

娘に対する限りないやさしさがあふれている父と子の情景である。

## 2. 父と息子

さて父と息子の問題となるとどうであろうか。世界の文学に於いても父と息子の問題を扱ったものは多い。

有名なツルゲーネフの父と子に於いては主人公は新しい思想の持主バザーロフであるにしろ、2組の親子の問題を扱っている。祖先伝来の貴族

であり、地主であるニコライキルサーノフとその息子アルカーディ、それからその息子の友人バザーロフとその父である。後者は祖父の代まで土を耕していた平民の子で中間階級に属する新しいインテリゲンチヤである。この2組の父と子の間に於ける旧時代と新時代の思想信念の衝突という古くて新しい問題を扱っている。だがどちらの親も持つ子供に対するあふる情愛、いつくしみはツルゲーネフ独特の美しい筆致で描かれている。19世紀に於る貴族階級の生活又新しい知識階級の青年が見事に取り扱われた作品である。

又同じツルゲーネフの作品**初恋**に於いては、父と子の間がまったく異なる角度から扱われ興味ふかい。貴族の少年ウラミジールは隣家の公爵の令嬢シュナイダーに生れて始めての恋に身も焦がれる程のあこがれを経験するが、その美しい女性の心を奪ったのは、なんと尊敬していた自分の父であったという憂愁極まりない作品である。青春時代の甘美な恋の思い出として描かれているが別の角度からの父と息子の問題も興味ふかい。

さて英文学に目を向けてみるならばビクトリア時代の英国の小説に於いても父と子の問題は扱われている。Samuel Butler の *The Way of All Flesh*、又 Charles Dickens の *Domboy and Son* に於いてはビクトリア時代の宗教道徳に対する反抗、子供の教育、結婚、職業の選択に関して、旧約時代の家長なみの權威をもって臨もうとする父親に対する子の反抗が扱われている。

Geroge Eliot の *The Mill on the Floss* に於いては19世紀に於ける親子の新旧の物の見方の相違を述べている。

さて嵐ヶ丘に於ける父と息子の対立はどのように扱われているのであろうか。その点エミリーはこのような19世紀という時代の思想に対しては全く無関心だったようである。この小説に於いては父と子の関係はヒンドリーとヘアトン、ヒースクリフとリントンとなるのであるが、ヒンドリーは既に正気ではなかったのであるから、これは問題外としておこらう。又先代アーンショウ氏も自分の息子ヒンドレーにはあまり愛情を示さなかったか

らこれも問題にはならない。アーンショウ氏はリバプールでひろって来た少年ヒースクリフの方により愛情を注ぎながら死んでしまうのであった。

では父と子の只一つの case であるヒースクリフとリントンとの間はどうのように展開していくのであろうか。

この残虐無比なヒースクリフに実子があろう等とは想像だに出来ぬ事のようにであるが、実際にはちゃんとした法律上の息子がおり、彼はこの息子を自分の手元で育てている。野生的に育てたヘヤトンとは違い、家庭教師をおき教育を与え、ミルクを与え、おいしい物を食べさせて暖炉の側で大事に育てる。だがヒースクリフの結婚は愛によるものではなかった。大事な恋人キャサリンを奪ったエドガー・リントンに対する復讐の為にだけ、その妹イザベラと結婚したのであるから、その間に出来た子供に愛情の持てる筈がない。立派になって戻ってきたヒースクリフにあこがれ、その誘いにより駆け落までしたイザベラではあったが、彼の冷酷な仕打ちには耐えられず、彼のもとを離れて南部の暖かい地に於いて赤ん坊を産み育てていたのであるが、子供を残して死んでしまう。ヒースクリフにしても自分の子供の誕生の喜びにも接していないので愛情を持てる筈もない。イザベラがヒースクリフのもとをのがれ、吹雪の午後 Thrushcross の生家に立ちよりネリーに一部始終を話すところがある。

... the speaker came forward to the fire, panting and holding her hand to her side. "I have run the whole way from Wuthering Heights." she continued after a pause. "Oh, I am aching all over. There shall be an explanation as soon as I can give it."<sup>(7)</sup>

(声の主はわき腹を押え、あえぎながら暖炉の方へ歩みよる。『嵐ヶ丘から走りずめなのよ。』一息ついて又話しはじめました。『ああ体中痛いこと。落ち着いたらわけを話すわ。』)

自暴自棄に笑う彼女の耳もとにはナイフの傷あとがある。ヒースクリフの投げつけたものであった。寒さに凍りついた血のかたまりも炉に暖めら

れて、解けてゆく、びしょぬれの服を着かえ話し終ると彼女は去ってゆく。既に身ごもっていたのである。この病弱の母親は子供を残して南の地で死んでいく。そしてその少年を連れに行くのはイザベラの兄、エドガー・リントンの役だったのであるが、何と早耳のヒースクリフは自分の息子は自分で育てなければならぬと使いをたて少年を嵐ヶ丘に連れてこさせるのである。そしてヒースクリフがこの子を始めて見た時の驚き嫌悪の情は次の様に表明されている。

‘God, What a beauty what a lovely, charming thing’ he exclaimed. ‘Haven’t they reared it on snails and sour milk, Nelly? oh, dawn my soul. but that’s worse than I expected—and the devil knows I was not sanguine.’<sup>(8)</sup>

(いやはや、何というやさ男だ。何という美しい可愛い坊やだ。かたつむりとすっぱいミルクだけで育ったのだろうか。何という事だろう。思ったよりひどい。いくら期待はしていなかったにしろ、これはひどい。面白くもない。)

がっかりしたヒースクリフだが心の底には何処かに父親らしい感情が残っている。

‘only nobody else must be kind to him. I’m jealous of monopolizing his affection.’<sup>(9)</sup>

(他のやつには手出しはさせん。おれはこの子の愛情を独占してしまう積りだ。)

父親の存在さえ知らされていなかったリントン少年はヒースクリフをはじめ見て最初のうちは恐れていたが、後はただあせんと見上げるだけである。ヒースクリフは一人しゃべり続ける。

‘We are not going to hurt thee, Linton. Isn’t that thy name? Thou art thy mother’s child, entirely. Where is my share in thee? puling chicken.’<sup>(10)</sup>

(『お前を傷つけたりはしないよ。名前はリントンだったっけ。全くお母さんの子だな。おれの血は何処を流れているんだ。泣き虫。』)

母親の血を多く引いているような自分の子供に嫉妬しながら、その愛情を独占したいと言いつつも息子に対する思いは父親らしいやさしさにあふ

れるものではない。少々場違いな利己主義なものなのである。

'I should not wish him to die till I was certain of being his successor. Besides he's mine, and I want the triumph of seeing my descendant fairly lord of their estate.'<sup>(11)</sup>

(こいつのあとおれが後つぎになることがはっきりする迄は此の坊主に死なれたら困るんだ。それにこいつはおれの血を分けた子だ。おれはおれの子孫が奴らの家屋敷の堂々たる持ち主になる勝利を味いたいんだ。)

The father launched his son a glance of bitter contempt.<sup>(12)</sup>

(そして父親はその息子に対してちらりと軽蔑の一蔑を投げたのでした。)となるのである。

ではこの父の息子に対する軽蔑、又憎しみは一体何を意味するのであろうか。エミリーには時代の思想の影響などというものは見られない。地域的な思想とか父と子の新旧思想の対立とか、親に離反する息子を描こうとしたものでないとするならば、彼女はこのヒースクリフという父親を通して表明したいものは何であらうか？ エミリーはこの父の感情を通して上流階級に対する反逆、反抗を表明しようとしているのではあるまいか。Arnold Kettle も述べているが、この小説のテーマは反逆であるという。そして、この重大なテーマを先ず読者に紹介する為にエミリーは日誌の一部をロックウッドに読ませるというテクニックを用いていると説明している。

The situation at Wuthering Heights is wonderfully evoked in the passage from Catherine's journal, which Lockwood finds in his bedroom.<sup>(13)</sup>

(Heights に於ける立場はロックウッドが寝室のベッドの中で見出したキャサリンの日誌の中に見事に再現されている。)

An awful Sunday! 'commenced the paragraph beneath. 'I wish my father were back agin. Hindley's conduct to Heathcliff is atrocious — He and I are going to revel. — We took our initiatory step this evening. . . .'<sup>(14)</sup>

(嫌な日曜日、と下の一節は始っていた。お父さまが帰って来て下さっていたらよかったのに。ヒンドリーのヒースクリフに対するやりかたはひ



---

どい。ヒースクリフと私は反抗しようとしている。先ず今夜はその第一歩だ。)

リバプールのスラムから来た孤児のヒースクリフはアーンショウ氏からはやさしく扱われたがヒンドリーからは侮辱され、墮落させられる。父アーンショウが死んだ後ヒンドリーは農奴の地位にその少年を陥らせてしまふ。教育も受けさせられず、農場で働かされる。The Social Contact の最初に文にある通り

“man was born free, but everywhere he is in chains.”

(人間は自由に生まれついたはずなのに、何処でも拘束されている。)

そして更に日誌には兄ヒンドリーの横暴が続く。彼とその妻とは階下の炉の火の側でぬくぬくと楽しみながらヒースクリフとキャサリンには寒い二階で三時間もの長いジョセフの説教を聞かせる。あげくのはては、台所の方へほうりこまれる。

こうした兄の仕打に対して二人は反抗するのであるが、この反抗こそが嵐ヶ丘のテーマであるとアーノルド・ケットルは説く。

以下彼の文を引用しよう。

The rebellion is against the regime in which Hindley and his wife sit in fatuous comfort by the fire whilst they are relegated to the arch of the dresser. . . .

Against this degradation Catherine and Heathcliff rebel, hurling their pious books into the dog-kennel. And in their revolt they discover the deep and passionate need of each other. He, the outcast slummy, turns to the lively, spirited, fearless girl who alone offers him human understanding and comradeship.

And she, born into the world of Wuthering Heights, senses that to achieve a full humanity, to be true to herself as a human being, she must associate herself totally with him in his rebellion against the tranny of the Earnshaws.<sup>(15)</sup>

(この反抗は自分達ヒースクリフとキャサリンは食品棚の下のアーチ型のすみっこで凍りつきそうに震えながらでいるのにヒンドレーとその奥さ

んとは暖炉の側で馬鹿みたいに心地よく過ごすという体制の中でおこっているのである。此の墮落に対してヒースクリフとキャサリンは反抗する。敬虔な本は犬小屋に投げ捨ててしまう。その反抗に於いて二人は互いに必要であることを深く情熱的に発見する。捨子であったみずばらしいヒースクリフは生き生きとした元気なキャサリンに目を向ける。そして彼女だけが彼に人間的な理解・友情をさしだす。そして嵐ヶ丘の世界に生れた彼女は人間性を十分に全うするためには人間として自分に忠実でなければならぬということを実感するのである。アーンショウ家の暴逆に対する為にはヒースクリフと一体とならねばならぬ事を自覚する。)

これがアーノルド・ケットルの述べる嵐ヶ丘の目的だとするならば、ヒースクリフの息子に対する憎しみもこの暴逆に対する反抗の一つの現われであると考えてもよいであろう。普通であれば、立派に成長した実の息子を誇らしげに眺めるところであろうが、その自分の息子は自分の期待に反して余りにも弱々しく上流階級の息子らしく我がままに育てられていた。それは彼にとっては我慢ならぬところであろう。又赤ん坊の時から一緒にいたわけでない少年に成長してから始めて突然に遭うのであるから愛情のわかぬのも当然であろう。又恋かたきエドガー・リントンへの憎悪に燃えていたヒースクリフにすれば、その妹イザベラとうまく駆け落ちして、生ませた子がリントン少年であれば、愛情のわかぬのが当然であろうか。

だが思うにこの彼の感情のなかにはエミリーの上流階級に対する憎しみがこの子への思いを通して表明されていると解釈してもよからう。

この上流階級に対する憎しみはヒースクリフが三年間の雲隠れの後突然リントン夫妻の前に姿を現わした際狂喜するキャサリンに対しての夫エドガーの冷い批判的な言葉『ここで彼と一緒にお茶を飲むの?』と驚き肉肉るエドガーの言葉に対して、

'Set two tables here, Ellen, one for your master and Miss Isabella, being gentry, the other for Heathcliff and myself, being of the lower orders.'<sup>(16)</sup>

『テーブルは二組用意してね。上流階級でいらっしゃるからこちら様には此処で召しあがって頂き、私ども二人は別のテーブルでお茶を頂きますわ。私共二人は下級社会の人間ですから』というキャサリンの勝ち誇った言葉の中にも感じとれる。

このヒースクリフのもつ憎しみに対しては、エミリーは決してそれを悪だとは決め付けていない。David Cecil も述べる如く

In consequence that conflict between right and wrong which is the Victorian view of life does not come into her mind.<sup>(17)</sup>

(結果として、当時のビクトリア朝時代の人生観であった善悪の考え方はエミリーの頭の中にはなかったのである。) その故にその為に苦悩することも全然なかったのである。

キャッシーは成長して心ひかれるままに、父の禁止も忘れて、嵐ヶ丘に近づくのであるが、そこで会ったのは久しぶりに会う従兄弟リントンと今まで見たこともない粗野なヘヤトンである。これも自分の従兄弟であると知らされ誠にがっかりする。また教養もない字も読めないヘヤトンに対し始めは実に軽蔑し冷酷な態度をとるのであるが、エミリーはこれに対して何等批判は加えていないのである。キャッシーが自分の最初の態度を後悔したとか、詫びたという段は見受けられない。後になって彼女はやさしく振舞い字を教え読む事を教え彼を教養ある人間と仕立てて、二人の間に新しく芽生えた愛を成長させて結婚に至るようだとの暗示はあるが。……

ヒースクリフの息子に対する激しい憎しみは中産階級の持つ虐待に対する怒りの現れであるとするならば、その息子への憎しみを通して発散された彼の怒りは中産階級の顔から虚偽のペールを引きはがす為に用いられたのであろう。

True to myself.

(自分に忠実である。) ということをも信念としたエミリーだ。嘘のかたまりのような顔をした真実性のない自分の息子をヒースクリフは愛することは出来ない。それでも彼は家庭教師をつけて勉強をさせ、部屋は暖かく

して安楽に生活させ、美味な食べ物を与えてぜいたくに育てたのである。

ヒースクリフの反逆に対して一緒に行動することを通してより完全な人間になれることをキャサリンは理解する。この深い人間の必要性に応えながら、キャサリンはヒースクリフと一緒に反抗した。財産ある人人の世界に復讐する為にその財産没収の為にあらゆる手段を尽くしたのであったが、自分の戦いの無意味さがやっと分かったのであった。即ちヒースクリフによる人間性の再達成がなされるわけである。

金を武器とす中産階級、また政略結婚をこととする彼等の社会に対してヒースクリフはあらゆる策を構じる。ヒンドレーをばくちに誘い金をすらせて窮地に追い込む。又イザベラと結婚するという政略結婚を自分もして、息子リントンにもキャッシーと無理矢理に結婚させる。全ての彼等の財産を没収して自分の物としてしまうという復讐をして、支配階級の用いる手段を自分も用いているのである。アーンショウ家、リントン家を上廻る力を手に入れることが出来るのである。

もう一度 アーノルド・ケットルの言葉を引用しよう。

Wuthering Heights then is an expression in the imaginative terms of art of the stresses and tensions and conflicts, personal and spiritual, of the nineteenth-century capitalist society. It is a novel without idealism without false comforts, without any implication that power over destinies rests outside the struggles and actions of human beings themselves. Its powerful evocation of nature, of moorland and storm, of the stars and the seasons is an essential part of its revelation of the very movement of life itself. The men and women of Wuthering Heights are not the prisoners of nature they live in the world and strive to change it, sometimes successfully, always painfully, with almost infinite difficulty and error.

This unending struggle, of which the struggle to advance from class society to the higher humanity of a classless world is but an episode, is conveyed to us in *Wuthering Heights*.<sup>(18)</sup>

(故に嵐ヶ丘は19世紀社会資本主義の緊張、圧迫をそして闘争を個人的に理想的に想像力あふるる言葉で画いたものである。理想を掲げた小説でもなければ、偽りの慰めをもたらす小説でもない。又彼等の運命を支配す

---

る力は人間自体の苦悩や行動の外にあるのだという事をほのめかしているのでもない。自然に力強く表明し、広野を又嵐を星を季節を克明に描写している事は、人間性の動きそのものを表明する根本的部分である。嵐ヶ丘に出る人物達は男も女も別に自然のとりこになっているわけでもない。彼等は自分の住む世界の中に生活し、その世界を変えてゆきたいと努力するのである。が時にはそれに成功したが、大抵の場合は痛く失敗し無限の困難を味わうのである。

この階級制度のある社会から階級制度のない自由平等のより高度な人間性の社会へと前進させたいという苦闘はエピソードに過ぎないかも知れないが、嵐ヶ丘を通して我々に伝って来るのである。

さて、もう一つの父と子の感情を探してみよう。これは父と子の関係とは言えないかも知れないが、ヘヤトンにはヒースクリフから幼時から育てられ、ヒースクリフを父とも思って成長した人間である。ヒンドリーの息子であるからヒースクリフとは血のつながり等は何もない。朴とつな愛すべき性格の田舎者であるが、ヒースクリフは彼がヒンドリーの息子であるが故に復讐の手段としてこの子を無教養に育ててゆく。

ネリーは Thrushcross Grange でキャサリンの忘れがたみキャッシーを育てるのに忙しくて嵐ヶ丘にも長年のご無沙汰をしているのであるが、ある時、気になってたまらず、急に嵐ヶ丘を訪ねてみることもある。赤ん坊の時育てたヘヤトンがひょいと顔を出すのだが、彼はネリーの顔を見るや悪態をつくような野蛮な育てられかたをされている。ネリーは手に持ったみかんを高く持ちあげる。すると

He jumped at the fruit. I raised it higher. "What does he teach you?" I asked. 'Naught,' said he.

"Ah and the devil teaches you to swear at Daddy?" I observed. "Ay, nay" he drawled. "Who, then?"

“Heathcliff.”<sup>(19)</sup>

(彼は果物に飛びつきました。私はそれをなをも高く上げました。

『なにをおしえてもらうの?』と私は尋ねました。『何も教えちゃあも  
らわないよ。』と彼は言いました。『じゃあ 悪魔が父ちゃんを呪えと教え  
たんだね』と私が聞くと彼は言いよどみました。『違うよ。』『じゃあ誰?』  
『ヒースクリフだよ。』)

I asked if he liked Mr. Heathcliff?

‘Ay,’ he answered again.<sup>(20)</sup>

(『ヒースクリフを好き?』と私が尋ねますと彼はもう一度『うん』と  
答えました。

自分が教育を受けさせてもらえず、無知のままに育ったように、自分も  
この子を野性のままに育てたいとヒースクリフはネリーに話す。

I have a pleasure in him, he continued reflecting aloud. ‘he has satisfied my  
expectations. If he were a born fool I should not enjoy it half so much.  
But he is not fool, and I can sympathise all his feelings, having felt them  
myself.’<sup>(21)</sup>

(『おれはあいつを見ていると楽しいんだ。』とヒースクリフは考えてい  
る事を声に出して言いました。『あいつはおれの考えを満足させてくれた。  
もしあれが生れつきの馬鹿なら半分も面白くもない。だがあれは馬鹿では  
ない。おれにはあれの気持がよく分るんだ。おれが自分で経験したことな  
んだから。』)

ヒースクリフは勉強したかったのにヒンドリーの妨害にあつてその夢は  
果たせなかった。その夢はヘヤトンだって持っている筈だから、馬鹿じゃ  
ないからそのくやしさは分るだろう。それを思つて実に痛快だと話すヒ  
ースクリフである。例によってエミリーはこのようなヒースクリフを何とも  
批判していない。

だがこのようなヒースクリフの死を一番悲しんだのはヘヤトンであつ  
た。

But poor Hareton, the most wronged, was the only one that really

---

suffered much. He sat by the corpse all night, weeping in bitter earnest. He pressed its hand, and kissed the sarcastic, savage face that every one else shrank from contemplating, and bemoaned him with that strong grief which springs naturally from a generous heart, though it be tough as stempered steel.<sup>(22)</sup>

(ところがヒースクリフの死を本当に心から悲しんだのは誰よりも一番虐待された筈のヘヤトンでした。彼は一晩中死体の側に座り、心の底から身も世もあらぬげに、泣き明かしました。冷くなった手を握りしめ、誰もがしりごみして、眺める事さへしないその冷笑をたたえた残忍な顔に口づけさえしています。そして鍛えた鉄のように強靱でありながら、ひろい雅量をそなえた心から自然にほとぼしり出る強い悲しみをもってヒースクリフの死を悼むのでした。)

ここで興味ふかい事はヒースクリフは生前早くからこの虐待して喜んでいゝヘヤトンが自分を慕い自分に対する愛情を見抜いて悦に入っているところである。

ヘヤトンは俺にすっかりなついているんだ。ヒースクリフはこの考えに対してくすりと悪魔的な笑いを漏らしました。

ヒースクリフも血を分けた自分の子の不甲斐なさと、このヘヤトンの相違をよく心得ている。

There is this difference, one is gold put to the use of pavingstones, and the other is the polished to ape a service of silver.<sup>(23)</sup>

『これだけの違いはあるよ。一人は舗道の敷石に使われてはいるが、金の価値があるね。だがもう一人は銀の役目はさせられているが、にせもので只磨きかけた錫に過ぎん。』

自分の息子の価値なさはよく心得えてヘヤトンの立派さはちゃんと認めているのである。ヘヤトンにとってはヒースクリフは父親代りの大事な人間であり、父として一番慕った人でもある。このヘヤトンの思いとヒースクリフの思いを、比較してみれば興味深いものがあると思うのである。

Hareton with a streaming face dug green sods, and laid them over the brown mould himself.<sup>(24)</sup>

(ヘヤトンはさめざめと涙をこぼしながら芝生の緑の土を掘るとヒースクリフの死体を埋めて、その上に茶色の土をかけてあげた。)

この親と子の考え方の相違をエミリーはどの様に考えていたのであろうか。自分が復讐してやった人間に自分を慕わせるとは、完全に支配者階級に打ち勝つ勝利を得たとの喜びなのであろうか。

とにかくエミリーの考えたのは支配者階級のない世界、階級差別のない平等の世界を父と子の問題を通して考え、また念じていたと推察するのも興味ある見方であると思う。

注

- |      |   |        |
|------|---|--------|
| (1)  | The Brontës and their World. Phyllis Bentley. Thames and Hudson   | p. 117 |
| (2)  | Wuthering Heights. Emily Brontë. Oxford University Press Chapt. XVIII   | p. 334 |
| (3)  | " " "   | p. 349 |
| (4)  | " " "   | p. 349 |
| (5)  | " " "   | "      |
| (6)  | " " "   | "      |
| (7)  | " " " (Chapt. XVII)   | p. 210 |
| (8)  | " " " (Chapt. XX)   | p. 256 |
| (9)  | " " " (Chapt. XX)   | p. 257 |
| (10) | " " "   | p. 256 |
| (11) | " " "   | p. 257 |
| (12) | " " "   | p. 257 |
| (13) | Emily Brontë Wuthering Heights. Arnold Kettle.<br>A Wuthering Heights Handbook. (Lettis and Morris) The Odyssey Press | p. 111 |
| (14) | Wuthering Heights Chapt. III  | p. 16  |



---

(15)	Emily Brontë Wuthering Heights, Arnold Kettle	p. 112
(16)	Wuthering Heights Chapt. X	p. 116
(17)	The Early Victorian Novel. David Cecil	p. 25
(18)	Emily Brontë Wuthering Heights, Arnold Kettle	p. 121
(19)	Wuthering Heights Chapt. XI	p. 195
(20)	" " "	"
(21)	" " Chapt. XXI	p. 270
(22)	" " Chapt. XXXIV	p. 415
(23)	" " Chapt. XXV	p. 127
(24)	" " Chapt. XXXIV	p. 415